



Ⅱ. 三島市のスポーツの現状と課題

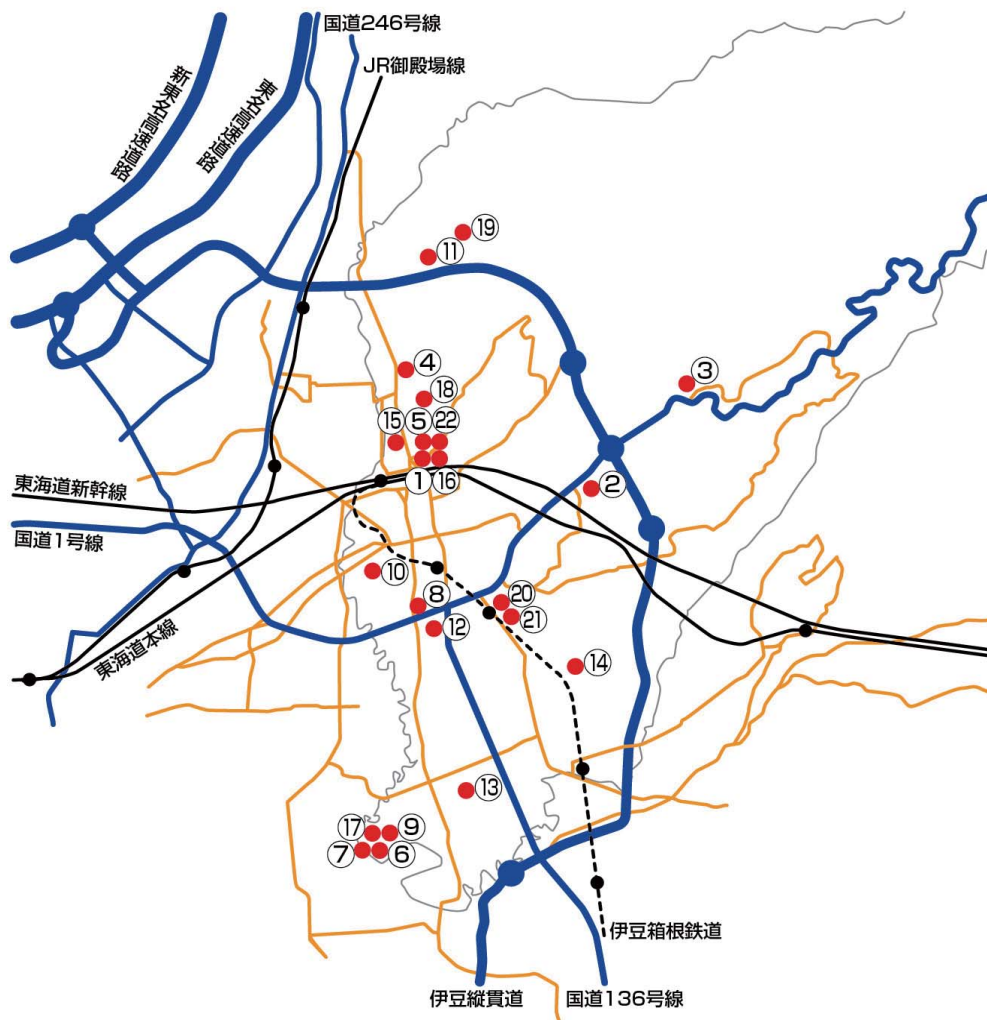
1. スポーツ資源の現況

1.1 スポーツ施設

(1) スポーツ施設の整備状況

本市では、2005(平成17)年度から体育施設において指定管理者制度を導入し、市民サービスの向上に努めるとともに、地域住民のスポーツの場として、小中学校の体育館やグラウンド等の開放を行っている。

■ 公共スポーツ施設位置図



■ 主なスポーツ施設一覧表

	施設名	規模(m ²)	種別		施設名	規模(m ²)	種別
1	市民体育館	延床面積5,777	総合体育館	12	南中グラウンド	—	開放(夜間照明)
2	錦田グラウンド・テニスコート	8,383	夜間照明、ソフトボール、全天候型テニスコート	13	中郷西中グラウンド	—	開放(夜間照明)
3	市の山グラウンド	6,364	ソフトボール	14	向山小グラウンド	—	開放(夜間照明)
4	徳倉グラウンド	4,175	ゲートボール	15	北小グラウンド	—	開放(夜間照明)
5	文教テニスコート	3,153	全天候型	16	市民温水プール	延床面積3,853	温水プール
6	長伏グラウンド	26,834	夜間照明	17	長伏プール	7,540	プール
7	河川敷グラウンド	27,916	野球、サッカー	18	上岩崎プール	1,140	プール(25m、幼児)
8	南田町広場	4,000	広場	19	北上グラウンド	17,362	少年野球、サッカー
9	浄化センター広場	5,015	広場	20	南二日町人口芝グラウンド	12,094	成人サッカー、フットサル
10	西小グラウンド	—	開放(夜間照明)	21	南二日町多目的グラウンド	19,200	成人サッカー、ソフトボール
11	北上中グラウンド	—	開放(夜間照明)	22	弓道場	520	市民体育館併設

(2) スポーツ施設の利用状況

三島市の公共スポーツ施設の利用状況は次のとおりとなっている。

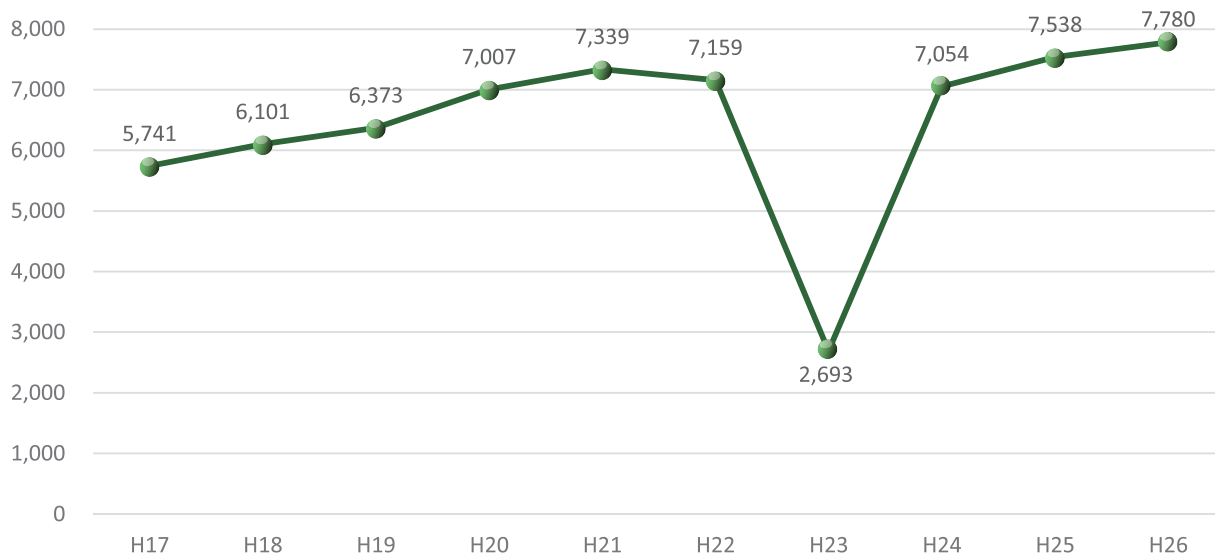
① 市民体育館

年間延べ利用者数は、2014(平成26)年度は25.0万人と、人口の2倍以上の人に利用されている。また、その数は、近年増加傾向にある。



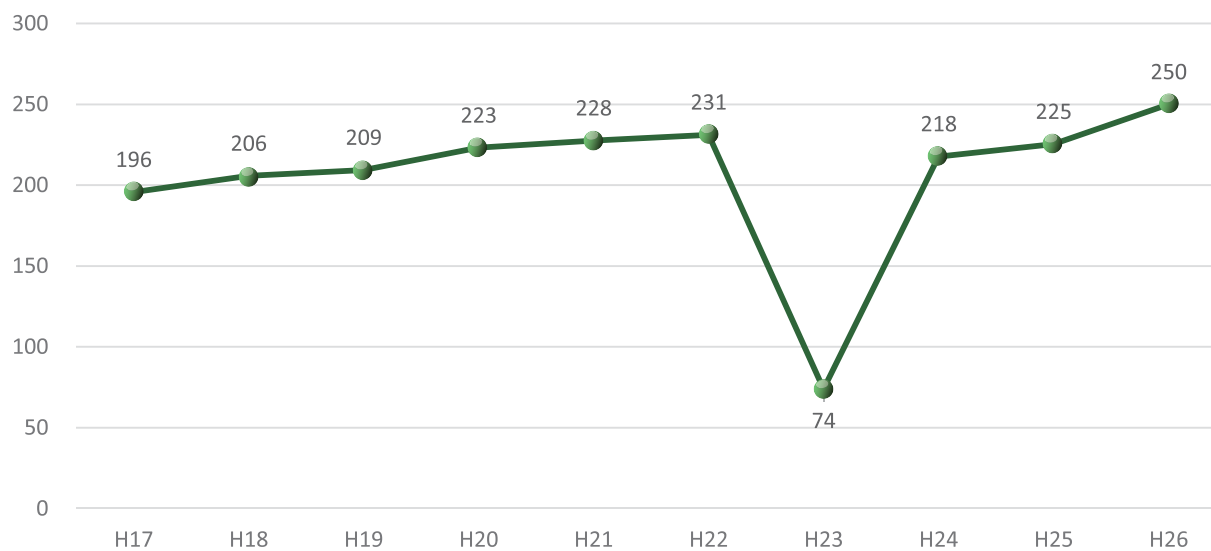
■ 市民体育館利用状況（年度別推移）

(件数)



(利用人数)

【単位:千人】



※2011(平成23)年度は、耐震補強改修工事のため7月から3月まで利用を休止。

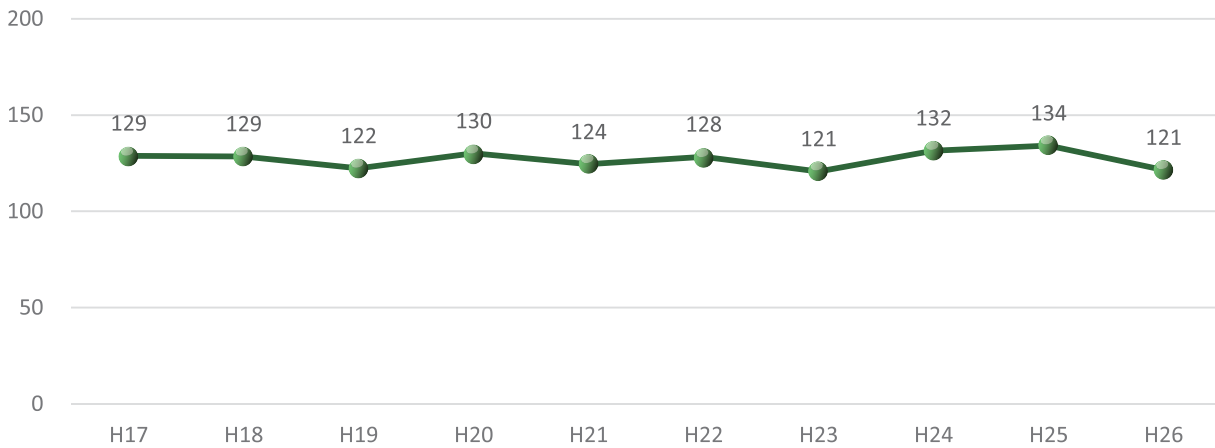
② プール

三島市民温水プール、及び長伏、上岩崎プール3施設の合計年間利用者数は、2014(平成26)年度で12.1万人となっており、例年、12~13万人で推移している。



■ プール利用者数 (年度別推移)

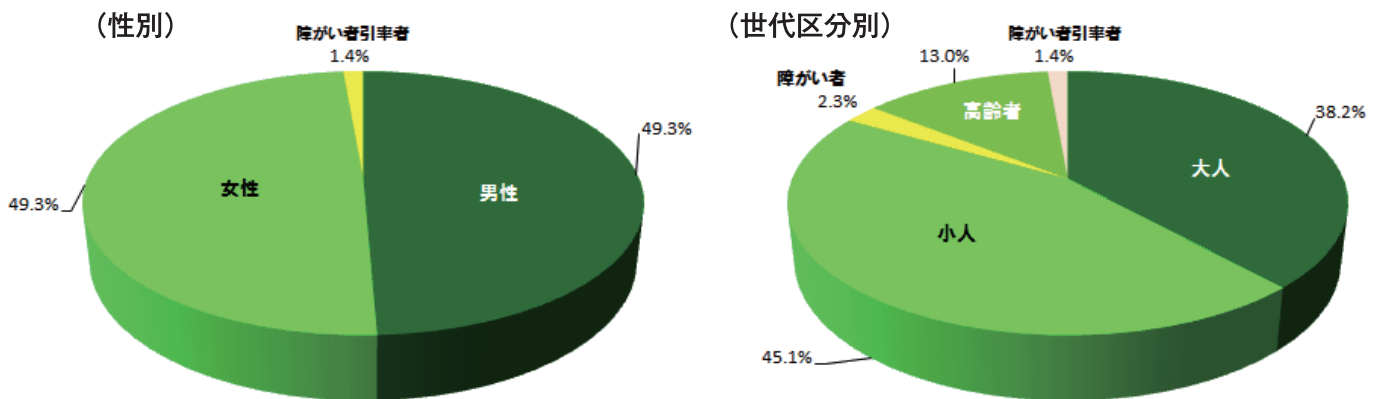
【単位:千人】



※2014(平成26)年12月8日から31日まで塗装工事のため市民温水プールは利用を休止。

2014(平成26)年度の三島市民温水プールの利用者の内訳、合計人数は、下記のとおりである。

■ 三島市民温水プールの年間利用者数と内訳 (平成 26 年度)



年間利用者数合計：108,601人

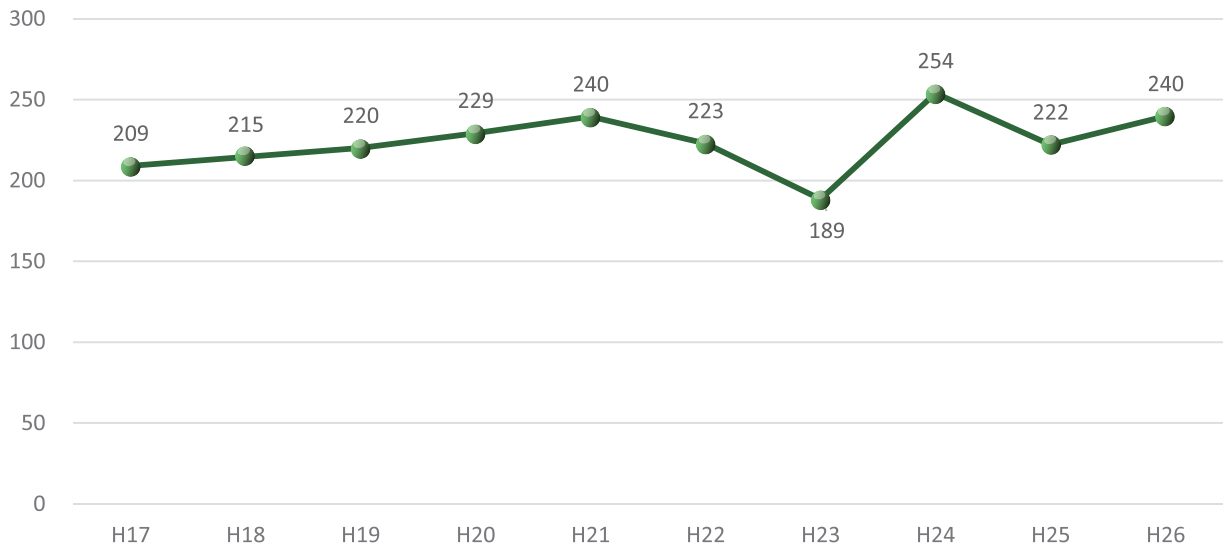
③ グラウンド等

グラウンド等の全体の年間利用者数は、2014(平成26)年度は延べ24.0万人、施設別では、南二日町人工芝グラウンドの利用がもっとも多く、年間延べ5万人以上の利用がある。



■ グラウンド等の利用状況
(利用人数の推移)

【単位:千人】



(グラウンド別利用人数 / 平成 26 年度)

グラウンド	人数	グラウンド	人数
長伏Aグラウンド(夜間)	4,507	市の山グラウンド	1,441
錦田グラウンド(夜間)	980	北上グラウンド	9,732
文教テニスコート(夜間)	7,096	南二日町多目的グラウンド	20,737
錦田テニスコート(夜間)	1,519	南二日町人工芝グラウンド	50,730
長伏Aグラウンド	21,922	南田町広場	3,650
長伏Bグラウンド	23,203	浄化センター広場	40,990
長伏Cグラウンド	18,357	文教テニスコート	21,966
錦田グラウンド	5,102	錦田テニスコート	7,778
		合計	239,710

④ 学校体育施設の開放状況

学校体育施設開放事業による2014(平成26)年度の利用状況は下記のとおりとなっている。

■ 学校体育施設の利用状況

(施設別利用人数 / 平成 26 年度)

学校施設	人 数
小学校体育館14校(夜間)	48,785
小学校体育館14校(昼間)	5,932
小学校グラウンド14校(昼間)	25,859
中学校体育館7校(夜間)	31,921
中学校体育館7校(昼間)	193
中学校グラウンド7校(昼間)	7,975
合 計	120,665

⑤ 体育施設指定管理者から見た利用の現状

市内の主要な公共体育施設は、各種大会や三島市の事業等で土日、祝日はほぼフル稼働であることから、市民利用のため、月に一回は週末(土日)に市民に開放するよう調整をしている。

公共体育施設を利用して開催されている各種教室は、午前と夜間の稼働率が高く、参加者は、主婦層やシニア層が比較的多い。稼働率の低い午後(13時~17時)の時間帯は、幼児教室、小学生教室等を開催することで利用促進を図っており、市民体育館では教室会場として、大会議室、多目的室等も活用している。



1.2 スポーツ団体

三島市における主要な市民スポーツ団体の活動状況は下表のとおりである。2013(平成25)年度からは、この6団体間の情報共有と連携によって、より効果的なスポーツ推進を図るため、三島市スポーツ関係団体連合会を設置し、定期的に会合を開催している。

■ 市内主要スポーツ団体の現状

団体名	活動の現状
NPO 法人 三島市体育協会	<ul style="list-style-type: none"> 各加盟団体主催の三島市スポーツ祭、三島かの川健康マラソン等の行事を例年開催している 22団体が加盟しており団体数はあまり変化がない 各団体とも少子高齢化の影響で加盟者数は減少している 活動の中心になっている団体は、サッカー、バレーボール、陸上、ソフトボールである 自主財源がなく活動が限定的なので、今後、収益事業を検討していきたい。そのために、目標、ビジョンを明確にする必要がある
三島市レクリエーション協会	<ul style="list-style-type: none"> 加盟団体は7団体 設立して14年。加盟団体の総会員数は約200名で、あまり変わらない 加盟団体が、地域の小学校等で定期的にスポーツ教室を開催 年1回「三島市レクリエーション祭」を合同開催 加盟団体教室の集客力の向上、指導者の高齢化による後継者対策が課題
三島市スポーツ推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 委員数は39名。定員は、校区から2名ずつ(28名)、市の推薦12名計40名 任期は2年。平均55歳で、他都市に比べてやや高い 年間を通じて稼働日数が多いため仕事との両立が難しく、若年層(20~30代)が少ない
三島市体育振興会連絡協議会	<ul style="list-style-type: none"> 市内14の各小学校校区に体育振興会があり、年間を通じてトリム教室やイベント、校区運動会などを実施している 各校区の代表2名で連絡協議会を構成し、定期的に会合を開き情報交換を行っている 各地区の運動会開催の成功ノウハウなどを共有 協議会主催のニュースポーツ研修会を開催(年1回)
三島市スポーツ少年団	<ul style="list-style-type: none"> 団体数は現状維持だが、団員数は平成26年度700名、27年度は690名、この3年間減少傾向である 指導者の世代交代は、それほど問題にはなっていない(団員の保護者から後継者を選び育成するなど) 保護者の負担が大きく、こどもがやりたくても入団させないケースもある スポーツ少年団を卒団した後の中学校の受け皿が課題
NPO 法人 エンジョイスポーツ三島	<ul style="list-style-type: none"> 南二日町グラウンドのクラブハウスや小学校で会員制の教室事業を行っている 会員数は現在約400名。文化活動も展開し、会員数の増加に努めている 会員は子どもと成人がほぼ半分ずつ。成人は40~60代が中心。高校生、20代層が少ない 安価な会費で運営しているため指導者に十分な指導料が払えない 営利目的の教室、指定管理者の行う教室と重複する部分があることや指導者の確保、養成が課題である

1.3 スポーツ関連施策の現況

本市及び関連団体が推進している主な施策、事業をライフステージ別にみると下図のとおりとなる。

■ ライフステージ別の運動・スポーツ施策の現状

区分 (対象人口)	関連団体	スポーツ推進課	健康づくり課	社会福祉部	商工観光課	教育委員会
乳幼児期 (0～5歳) 5,406人		スポーツスタート (1,854人)		交流ひろば (2,886人) 親子体操遊び等		親子で楽しむ！ ふじのくにファミリープレイプログラム (148人) お父さんの子育て講座 (110人)
学童期 (6～12歳) 7,053人	少年団	スポーツ・レクリエーション大会助成(市民運動会小学校区大会・伊豆マラソン大会等)	健康マイレージ(2717人)			公民館講座
思春期 (13～19歳) 7,373人	スポーツ推進委員活動・体育施設指定管理者／関連団体主催教室など	スポーツ・レクリエーション大会助成(市民運動会小学校区大会・伊豆マラソン大会等)	ノルディックウォーキング推進(1000人)※			部活動支援
青年期 (20～39歳) 23,530人	各種スポーツ大会の開催(市民スポーツ祭など)	スポーツ・レクリエーション大会助成(市民運動会小学校区大会・伊豆マラソン大会等)	産前・産後のケアセミナー (300人)※			(参加人数) 中郷：3,740 北上：3,236 錦田：1,436 坂：216
壮年期 (40～64歳) 38,675人	ゲートボール・グラウンドゴルフ・輪投げ大会	スポーツ推進奨励等補助	みしま体操普及(1081人)		三島市障がい者スポーツ大会(350人)	公民館自主講座
前期高齢期 (65～74歳) 15,976人			ロコモ講座(45人)		駿豆線沿線広域ウォーキング(484人)	三島いきいきカレッジ(235人)
後期高齢期 (75歳～) 13,560人			生きがい教室(34970人)		三島市四大ウォーキング(6067人)	

・団体助成事業、施設管理・運営事業は除く。区分の人数は2015(平成27)年7月31日現在の人口。

・各事業欄の人数は2014(平成26)年度参加人数。[*は2015(平成27)年度の見込み数]

1.4 トップチームの活動

(1) 東レアローズ男子バレーボールチーム

本市では、バレーボール男子のトップリーグであるV・プレミアリーグに所属する名門バレーボールチーム、東レアローズ男子バレーボール部が本拠地を置き活動している。例年、三島市民体育館でリーグ公式戦が数試合開催されている。

トップチームの活動だけでなく、春、夏休みの時期には、同チームの体育館や工場内の宿泊棟を利用して全国の高校や大学チームを受け入れ、練習試合の機会を提供しているほか、男子中学生対象の教室や地域でのバレーボール教室の開催などの地域貢献活動を行っている。

また、2015(平成27)年9月に開催されたFIVBワールドカップの際には、大会に参加する男子のアメリカ代表チームが東レ体育館で事前合宿を行い、東レアローズとの練習試合が一般公開された。

同チームは、2020年東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿誘致にも取り組み、それを契機により地域と連携を深め、バレーボールの普及や地域の活性化につなげていきたい意向を持っているが、同チームと地域をつなぐコーディネート機能、人材の確保が課題となっている。



(2) アスクラロ沼津

アスクラロ沼津は、静岡県東部地域でJリーグクラブをめざして活動しており、2013(平成25)年にJリーグ百年構想クラブ^(II-1)に認定されている。

これまで東部地域は、サッカー王国静岡の中でもサッカー後進地域と呼ばれてきたが、同クラブは地域に密着し、選手の育成を重点に置いた活動を展開することで、この地域から多くの日本代表選手を輩出することを目標としている。

同クラブは「強化」と「普及」を活動の両輪として位置づけ、幼児から中学生までを対象にしたサッカースクール事業にも力を入れている。また、サッカーだけでなく、テニス、新体操、バレーボールなどの競技についても総合型スポーツクラブとして活動している他、地域の指導者と連携してスポーツや文化教室を開催する「スポーツ&カルチャースクール」も展開している。



(II-1) 将来日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)への入会を目指す、日本フットボールリーグ(JFL)以下のカテゴリーに所属するサッカークラブに対して、Jリーグが規約に基づき認定したクラブ。

1.5 スポーツ大会の開催状況

(1) 市民、東部地区レベルの大会

本市では、NPO法人三島市体育協会及び同協会に加盟する競技団体が主催する三島市スポーツ祭をはじめ、年間を通して各種競技大会が数多く開催されており、市民の生涯スポーツを支えている。

また、スポーツ少年団、中学、高校の各種競技の市、東部地区大会の開催も多い。

(2) マラソン・駅伝大会

マラソン・駅伝大会では、1月に「三島成人式記念駅伝大会」、2月に「三島かの川市民健康マラソン」が市内で開催されている。

伊豆市、伊豆の国市、函南町と本市が共同で開催している「伊豆マラソン大会」は、修善寺から三嶋大社までの約21kmをメインコースとしており、県外からも含め、多くの参加者を集めている。



(3) 全国、トップレベルのスポーツ大会

三島市民体育館では、例年、バレーボールの国内最高峰リーグである男子Vプレミアリーグの公式戦が2~3試合開催され、市民がトップレベルの競技を観戦する機会となっている。

11月には、三島市民体育館を舞台に、女子レスリングの全国大会である「全日本女子オープンレスリング選手権大会」が開催されている。この大会は、(公財)日本レスリング協会傘下の全日本女子レスリング連盟が主催するもので、2015(平成27)年で10回目となっている。小学校からシニアまでの4つのカテゴリーに分かれ、300名以上が参加して日本一が争われ、高校生以上の上位入賞者には全日本選手権の出場権が与えられる。

2003(平成15)年の静岡国体で東伊豆町がレスリングの会場となったことから、当初は東伊豆町で開催されていたが、2008(平成20)年以降は、交通アクセスの良さなどを理由に三島市で開催されている。



(4) 高校クラブの交流大会

3月下旬の3日間に恒例開催される「三島市バレーボールフェスティバル(高校女子の部)」は、全国から64チームが参加する大規模な大会である。三島市民体育館を中心に、近隣高校の体育館など複数会場で開催されている。

三島市バレーボール協会が主催しており、当初は市内の高校だけが参加する大会であったが、関係者の努力で徐々に参加校を増やして現在の規模となり、例年、全国的に著名な強豪校も参加する大会に発展している。

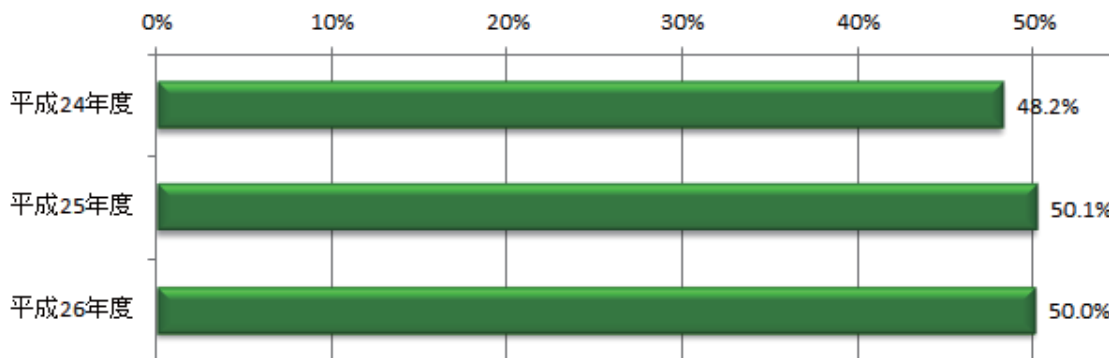
三島市民体育館周辺は、日本大学国際関係学部をはじめ、公立、私立の高等学校などが集積する文教ゾーンである。市民体育館を中心に、各学校が保有する体育館はすべて徒歩圏内にあり、それらを一体的に使用できれば、多数のチームが参加する規模の大きな大会の開催も可能である。現在でも12月下旬には、その一部を使用し、県内外から30チーム近い高校女子バスケットボールチームが参加する交流大会が開催されている。

2. 市民のスポーツ活動と意識

2.1 スポーツ参加率

市民意識調査の結果では、市民(成人)の週1回以上のスポーツ・運動の実施率の直近3年間の推移は、下記グラフのとおりとなっている。2014(平成26)年度の結果と比較すると、国(47.5%)、静岡県(41.9%)を上回っている。

■ 三島市民(成人)のスポーツ実施率(週1回以上)の推移

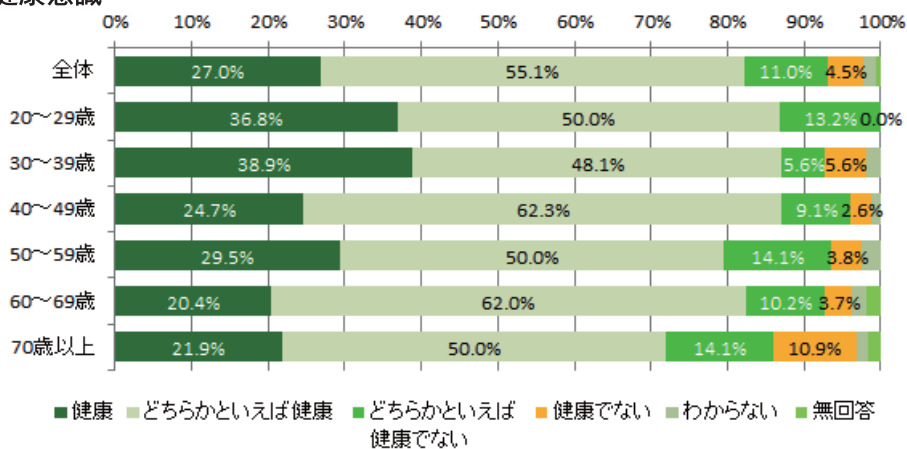


2.2 市民アンケート調査結果の概要

本計画の策定にあたり、市民のスポーツに対する意識、実施状況、施設への要望等を把握するため、20歳以上の三島市民1,000人(無作為抽出)に対して郵送によるアンケート調査を実施し、427件の有効回答を得た。その概要は、以下のとおりである。

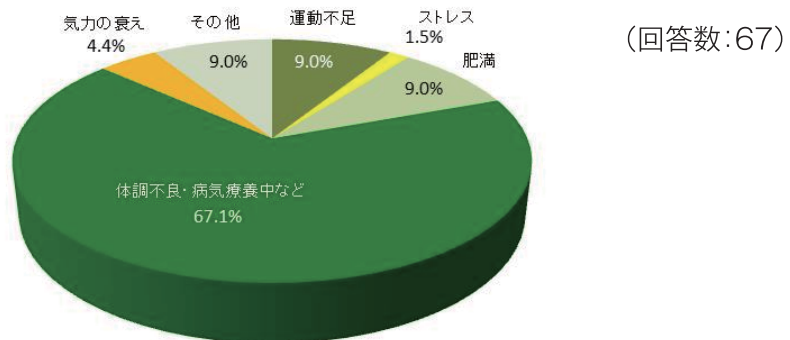
(1) 健康意識

■ 健康意識 (回答数: 419<年齢・性別不明を除く>)



- 全体で、回答者の8割以上が「健康」、もしくは「どちらかといえば健康」と感じている。そうでない人の理由は、約7割が病気療養中などである。残りの2割近くは「運動不足」か「肥満」を理由に挙げている。

■「健康でない」理由

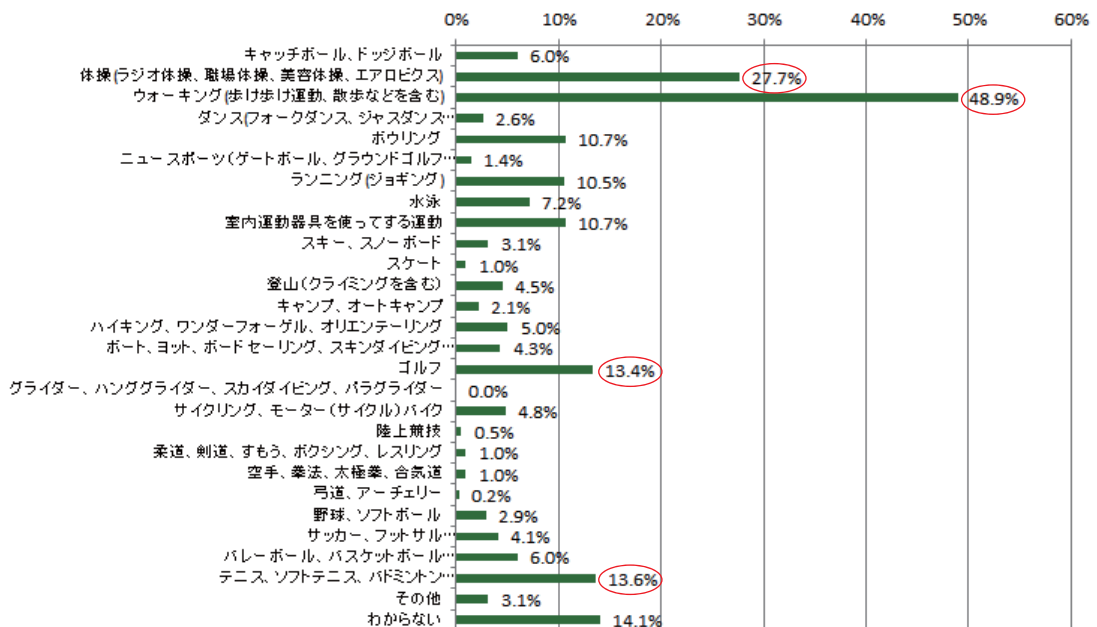


- 体力については、「自信がある」と「どちらかといえば自信がある」の合計が半数以上(54.2%)を占めている。女性の30歳代と40歳代は、体力に不安を感じている人が多い。
- 健康・体力維持のために心掛けていることは「食生活」(60.9%)がもっとも高く、次いで「睡眠や休養」(55.8%)となっている。「スポーツや運動」をあげる率は、男性は相対的に高いが、女性は全年代とも低くなっている。

(2) 実施スポーツ種目

■ 過去1年間で実施したスポーツ

(回答数:419)

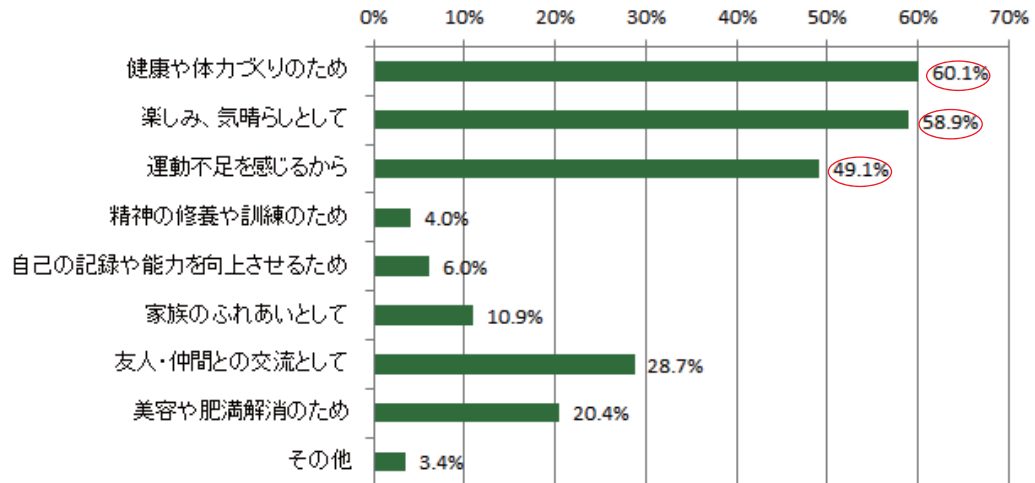


- 過去1年間で実施したスポーツは、「ウォーキング」(48.9%)が最も多く、次いで「体操」(27.7%)、「テニス等」(13.6%)、「ゴルフ」(13.4%)が上位となっている。
- 今後やってみたいスポーツは、「テニス等」(19.8%)が最も高く、次いでウォーキング(19.3%)、体操(16%)、水泳(13.1%)、ゴルフ(11.2%)の順である。60歳以上では男女ともに「ウォーキング」が最も高い。

(3) スポーツの目的と実施形態

■ スポーツの目的

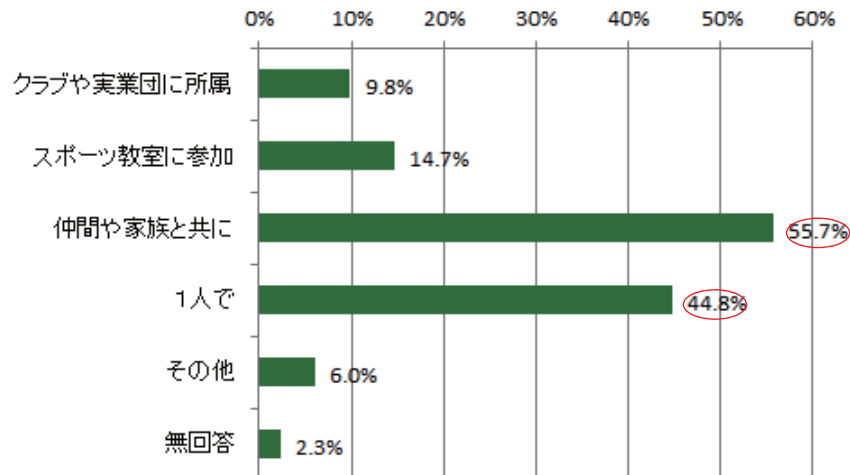
(回答数:348)



- スポーツの目的の上位3位は「健康や体力づくりのため」(60.1%)、「楽しみ、気晴らしとして」(58.9%)、「運動不足を感じるから」(49.1%)であり、健康づくりや気晴らし、運動不足解消のニーズが高く「自己の記録や能力を向上させる」競技としてのスポーツニーズは低い(6.0%)。

■ スポーツの実施形態

(回答数:348)

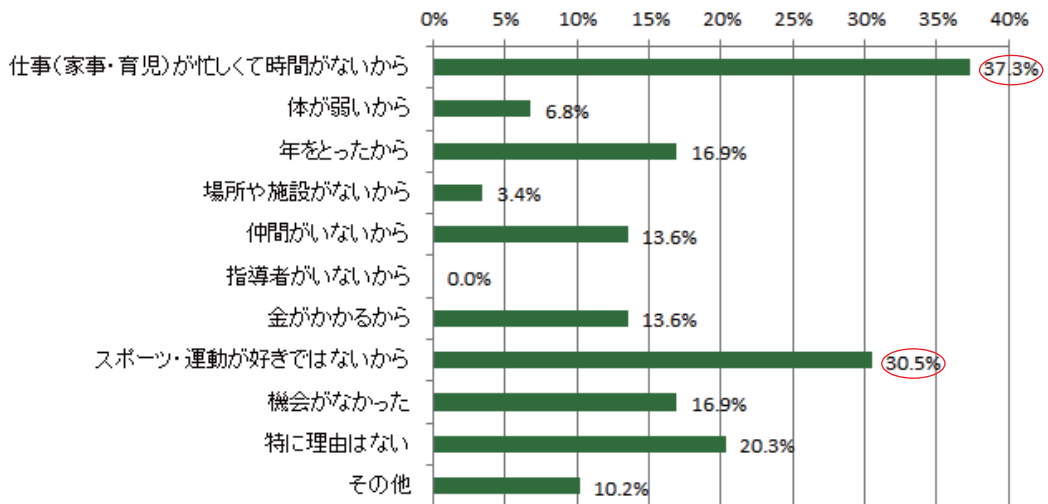


- 実施形態(複数回答)は「仲間や家族と共に」(55.7%)が最も多く、次いで「1人」(44.8%)となっている。教室、クラブ等に所属してスポーツ活動をする率は、両方を合わせて4分の1程度である。
- 50歳代以下の年代では「仲間や家族と共に」がもっとも高く、60歳以上は「1人で」との回答が多かった。また、「スポーツ教室に参加」は女性の割合が多く、男性は少ない傾向が見られる。

(4) スポーツ非活動層の状況

■ スポーツをしない理由

(回答数:59)

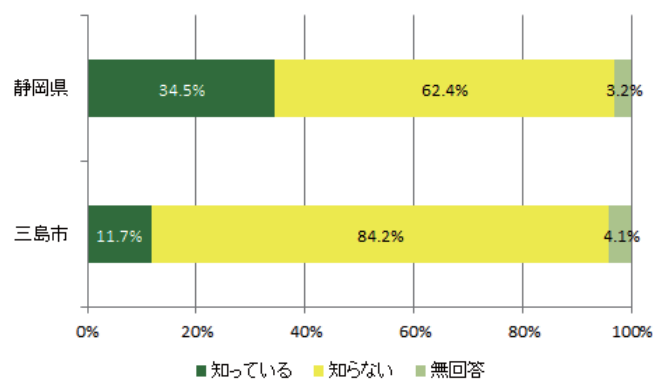


- 過去1年間にまったく運動・スポーツを行わなかった人の率は14.1%である。
- 理由は「仕事(家事・育児)が忙しくて時間がないから」がもっとも高く(37.3%)、次いで「スポーツ・運動が好きではないから」(30.5%)となっている。
- スポーツや運動をしていない女性のうち、2割超が「特に理由はない」と回答していることから、この層の実施率向上のためには、楽しみや交流につながるスポーツ情報の提供などで、スポーツに対する興味、関心を喚起していく必要がある。

(5) 総合型地域スポーツクラブとスポーツボランティア

■ 総合型地域スポーツクラブの認知度

(回答数:419)

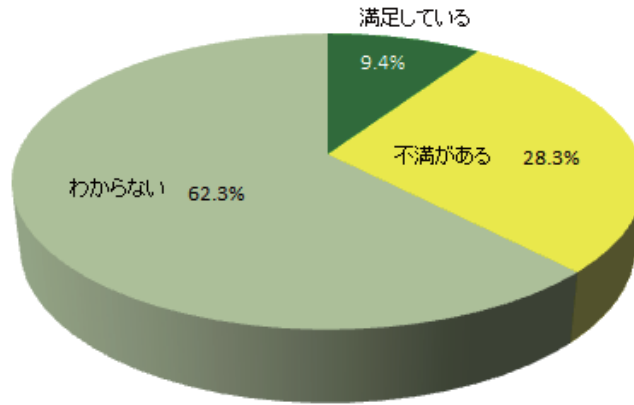


- 総合型地域スポーツクラブについては、男女ともに「知らない」が圧倒的に高い。
- 静岡県の調査と比較すると、認知度は三島市11.7%、静岡県34.5%と、20ポイント以上の開きがあり、三島市での認知度は低い。
- 過去1年間のスポーツボランティア実施率は7.0%で、国の調査結果(11.4%)よりも若干低くなっている。

(6) スポーツ施設について

■ 市内公共スポーツ施設の満足度

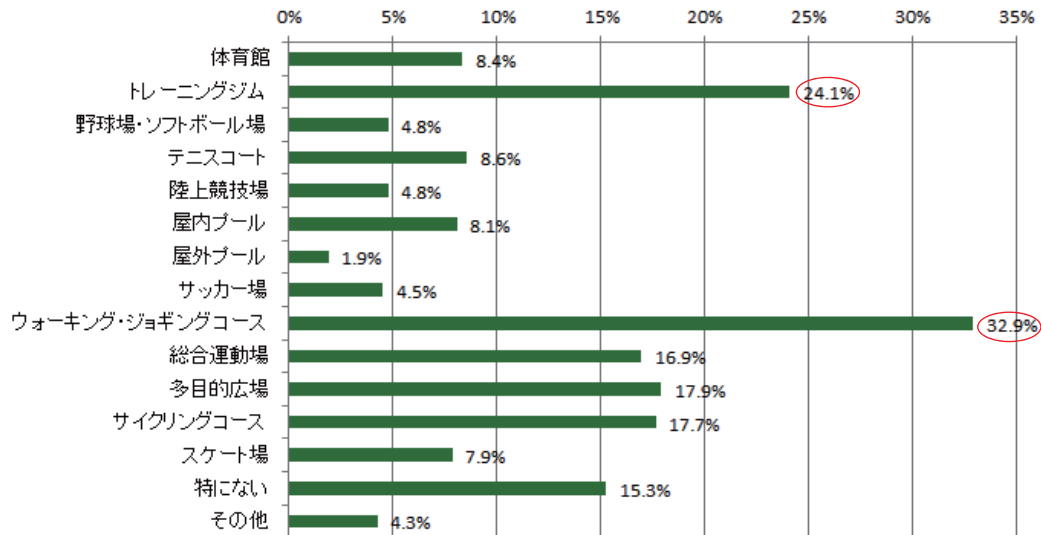
(回答数:403)



- 三島市の公共スポーツ施設については、不満(28.3%)に対して、満足と回答した人(9.4%)は3分の1にとどまっており、全体的な満足度は低い。
- 一番多くあげられた不満の理由は、全体では男女ともに「施設の数が多い」で、60歳代の女性と70歳以上の男女では「施設が近くにない」となっている。

■ 今後設置してほしい施設

(回答数:419)



- 「今後設置してほしい施設」は、「ウォーキング・ジョギングコース」(32.9%)が最も多く、次いで「トレーニングジム」(24.1%)となっている。若い世代は「トレーニングジム」が高い傾向にあり、50歳以上は男女ともに「ウォーキング・ジョギングコース」の要望が高い。

3. スポーツ推進の課題

地域のスポーツ活動は

- 1) 体育館や屋外のグラウンドなど、スポーツを行う「場」
- 2) 参加者に対して個々の適性に合ったプログラムを提供し、技術向上を支援するとともに、モチベーション(参加動機)を持続させる役割を担う「指導者」
- 3) 「場」と「指導者」をマネジメント^(II-2)し、最適なスポーツサービスを提供する「運営システム」

の3つの要素を必要とする。

環境の変化と本市スポーツの現状を踏まえ、求められる政策の方向性、及び上記の3つの要素に沿って、本市の今後のスポーツ推進課題を抽出する。

■ 地域のスポーツ環境のモデル



(1) 政策上の課題

- 2011(平成23)年に施行されたスポーツ基本法では、国民生活における多面にわたるスポーツの果たす役割の重要性が規定されたことから、関係団体などと連携しながら市民が気軽にスポーツに親しむことができる環境づくりを官民協働で進め、効果的にスポーツを通じたまちづくりを推進していく必要がある。
- 市の重点施策である「スマートウエルネスみしま」(健幸都市みしま)では、運動の習慣化による健康づくり(生活習慣病予防、介護予防)を重点施策として位置づけており、日常的に健康づくりを行うことのできるスポーツの場と機会の提供が必要となっている。また「地域の絆づくり」の観点からもスポーツが果たす役割は大きく、スポーツを媒介として地域コミュニティの活性化に取り組む事も重要である。
- 今後、急速に進展する人口減少・少子高齢化を克服し、地方創生を具現化していくために、三島市総合戦略において、結婚・子育て世代の定住促進が重要課題の一つとなっている。他市にはない魅力づくりの戦略として、子どもの運動能力や意欲、社会性、創造性を育むためのスポーツ環境を整備することが効果的である。
- 2020年東京オリンピック・パラリンピック等の開催を地域スポーツ推進の好機と捉え、大会終了後も持続する仕組み(スポーツレガシー)を創出する効果的な施策を展開していくことが求められている。

(II-2) マネジメント:スポーツ教室やクラブの経営などにおいて、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」の資源を有効に活用し、運営効率を高め、効果を最大化させること。

(2) 「場」の課題

- 市民アンケート結果では、スポーツ施設が身近になく、不足しているとの不満を持つ市民が多く、全体的な満足度は低い。
- 地域のスポーツ環境として、身近な場、高齢者や女性専用の場、初めてでも参加しやすい場が望まれている。
- 公共スポーツ施設、学校の体育施設開放とも、休日、平日夜間の稼働率が高く、施設の充実、利用効率のさらなる向上策、スポーツ施設以外の施設をスポーツの場として活用する方策、企業や大学等と連携した場の拡充策等が求められている。
- スポーツを通じて交流人口を拡大し、地域経済を活性化することをねらいとして、スポーツ大会や合宿誘致を行う上でも会場の確保が課題となるため、既存の大会や行事、市民利用との調整が求められる。
- 現状の施設の制約の中で、地域のスポーツ環境を整備していく方向として、ウォーキングやジョギング、サイクリングなど、施設を使用しないスポーツ人口を増加させる施策が有効と考えられる。
- 本市の公共スポーツ施設は全体的に老朽化が進んでおり、今後、保全、改修に係る財政負担が増加するとともに、高度化する市民ニーズとのギャップも広がっていく。ファシリティマネジメントの観点からも、財政計画との整合を図る中で、市民ニーズを踏まえた中長期的なスポーツ施設に関する保全・整備の方針を検討する事が求められる。
- スポーツの基幹となる競技スポーツを振興するための環境整備が課題である。



(3) 「指導者」の課題

- 生涯を通じてスポーツに親しむためには、幼児期から学童期までの間に遊びなどを通じて「体を動かすことの楽しさ」を体感することが重要であり、幼児期から学童期(小学校低学年)のスポーツ(遊びの要素を持った身体活動)を指導できる人材が求められる。
- 学童・思春期におけるスポーツ指導においては、勝つことが優先されるあまり、選手の自主性・主体性が損なわれたり、成長期におけるスポーツ障害やバーンアウト(燃え尽き症候群)等の問題を生じさせることが懸念されている。このため、たとえば、スポーツマンシップを指導する意義を啓発する等、指導者への適切な情報提供や研修機会を充実する必要がある。

- 市民主体で活動しているクラブは、指導者はボランティアとして活動しているケースが一般的である。活動を充実させるために、指導者の人材発掘、育成が課題となっている。また、指導者の高齢化が進み、世代交代が懸案となっている団体もある。
- スポーツ推進委員は、地域のスポーツをけん引する指導者として重要な役割を果たすことが期待されている。しかし、現状では、地域のスポーツ環境における指導者としての研修が充分とは言えない。大半の委員が生活における本業を抱える中での活動であり、時間的な制約もある。このような中、スポーツ推進委員の活動を支える効果的な研修等の充実が必要となっている。
- 今後、急速に高齢化が進展すると見込まれることから、高齢者の健康維持、介護予防や生きがいづくりのためのスポーツ・運動の推進が重要となっている。高齢者自身をボランティアや指導者として活用するなど、そのニーズに応えるスポーツ指導者の確保が必要である。



(4) 「運営システム」の課題

- 少子化や嗜好の多様化によって、スポーツ少年団、学校部活動などの従来の枠組みだけでは、子どものスポーツ環境を維持することができなくなりつつあり、既存の活動のあり方を見直すとともに、地域において新たに活動できる場の確保が求められている。
- 共働き家庭が増加する中で、保護者の負担が大きい子どものスポーツ活動が敬遠される傾向もみられる。経済的な格差が広がる中で、保護者の時間的、経済的制約から一部の子どものスポーツ環境が制約されることが懸念される。
- 体育振興会は、身近なスポーツ環境を提供する主体として重要な存在であるが、現状では、地域によって活動レベルに差があり、ノウハウが蓄積されず活動が低調な地域も存在する。校区間の情報共有による全体的な活動レベルの向上、スポーツ推進委員など他のスポーツ関連組織との連携強化が課題となっている。
- 市民ニーズは、競技系のスポーツよりもウォーキング、テニス、ゴルフなど、個人や少ない人数の仲間での活動するタイプのスポーツを求める傾向にあり、多様化するニーズに対応したスポーツサービスの提供が課題となっている。

- 運動参加意欲は、相対的に女性の方が少なく体力的な不安を抱える率も高い。特に40代までの女性のスポーツ実施率、関心が相対的に低いことから、子育てで支援との連携や駅、ショッピングセンターなどのスポーツ以外の目的で立ち寄る場の活用、美容やダイエット等を切り口としたアプローチなど、スポーツ無関心層の「初めの一歩」を踏み出せる仕掛け、仕組みが求められる。
- 約8割の市民が、概ね健康であると感じており「健康のため」というアプローチでは、スポーツ参加率を上げることは難しい。スポーツ無関心層に対して、楽しみや交流につながるスポーツ情報の提供などで、スポーツに対する興味、関心を喚起していく必要がある。
- 住民主体で実施されているスポーツ教室やイベントでは、広く市民に周知するための広報手段が課題となっている。
- スポーツに対する市民ニーズの変化、スポーツツーリズムなど、スポーツに期待される役割の拡がりに対して、既存のイベントや教室のあり方を見直す必要がある。
- 障がい者スポーツは、障がいを持つ人の社会参加を促進する有効な手段であり、障がい者スポーツを体験したり、健常者とともにスポーツを楽しめる等の機会の拡充が課題となっている。

